

# 大河内昭爾さん

(文芸評論家・武蔵野大学名誉教授)

## 大人が楽しむ文学の復権を

世の中は高齢化社会だというのに、なぜか若者のほうばかり向いている文芸雑誌や出版の世界。年配者は「読むものがないから」と、こぞって時代小説に向かい、一方で同人誌も衰退して文学は裾野を狭めている。「大人の文学」の復権を提唱する大河内さんに、現状への憂いと将来展望を聞いた。

### 若者志向一辺倒の文芸誌

——いま、雑誌の世界では総合誌が次々と休刊する中で、文芸誌は少数ながら刊行が続いています。しかし、その内容はどうも若者志向というか、若い作家による若い読者を想定した作品が中心で、中高年の読者が想定されていないという声を聞くのですが。

たしかに、『群像』や『新潮』のような文芸誌でさえ、いまは流行ばかりを追いかけて、一種の若者現象に引きずられている感がありますね。私は「活字文

化」というものには、ある種の鈍重さ、重厚さがあったてほしいと思っていますが、その鈍重さがなくなつて、多くが若者向きの軽薄さに流され、しかもその若者中心に活字離れの現象が加速しています。だから、せめて「読む習慣」のある年齢層には、活字に親しむ心が薄れてしまわないよう、雑誌が自身の重さで訴え続けていかなければいけないと思うのですが……。

——その「読む習慣」を持つ層が確実に高齢化しているのに、現状は高齢社会に見合った「出版状況」になつていないと？

そう。高齢社会になったのだから、高齢者向けにア